馬場 秀行 氏
永山 和夫 氏
秋山 光男 氏

（玉川消防懇話会会長・
元せたがやふるさと区民まつり実行委員長・
元財団法人せたがやトラスト協会理事長・
THE NATIONAL TRUST（英）終身会員・
玉川消防懇話会会長）

[馬場　秀行]

昭和53年4月～昭和58年3月	総務部副主幹（文化事業担当）
昭和62年4月～昭和63年3月	区長室長
昭和63年4月～平成　2年3月	総務部主幹 （財団法人世田谷区美術振興財団参事・ 世田谷美術館副館長）

[永山　和夫]

平成　2年4月～平成　6年3月	総務部文化課長
平成　6年4月～平成　9年3月	区長室広報課長
平成14年4月～平成17年3月	総務部長

インタビュー日時　令和4年7月12日　13時30分～15時30分

[聞き手]（肩書はインタビューの時点）

せたがや自治政策研究所次長	箕田　幸人
せたがや自治政策研究所主任研究員	古賀　奈穂
せたがや自治政策研究所主任研究員	田中　陽子
せたがや自治政策研究所研究員	大石　奈実
せたがや自治政策研究所研究員	伊藤　大樹
せたがや自治政策研究所特別研究員	金澤　良太
公益財団法人せたがや文化財団 世田谷美術館総務部長補佐	谷亀　緑郎

はじめに

古賀　貴重なお時間ですので、早速始めさせていただきたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

馬場　では私から、私と永山については経歴、その他はみんなわかっていると思いますけれども、秋山さんは急に、実を言うと私が最初にインタビューというか、話を聞かせてほしいということの連絡を受けて、私ももう大分年数がたっていますので、記憶が曖昧な部分があるので、一緒にやっていた永山さんに同席をと言っているうちに、秋山さんの家は私、しょっちゅう遊びに行っていますので、ここにこんな人がいるじゃないかというので、無理に言ってお願いしたところ、3人になってしまって、そういう意味では、話が3人になると1人ずつの厚みがないかもわかりません。中身が少し薄らぐかもわかりませんけれども、そこは勘弁してください。秋山さんについては、もうすでに経歴その他はわかっていると思いますけれども、トラスト協会の理事長をやっていたり、消防団の副団長をやったり、それから今やっている中で一番大きいのが東京外環道のPI、パブリック・インボルブメント、公共的立場の委員をやって、それからイギリスのナショナルトラストの終身会員だそうです。日本人の中にも、そう数はいないようでございます。区の関わりのもう一つは、保育園・幼稚園・小学校の芋掘り、中には親子2代で芋掘りをしていたという人もいるように、相当長いことやってもらっている。特に私が呼んだのは、区民まつりの実行委員長をお願いしたということもありましたので、ところが、私のときではないんですね。だから、私が文化の課長からどこかほかへ異動したあと、やってもらったので、その当時、秋山さんはほとんど知らないんですよ。1回ぐらい会ったけれども、顔なんかほとんど、覚えていない。それはともかく、そんなことがあってトラスト協会に秋山さんが行ったときに、私もトラストの事務局長をやったもので、そこからぐっと近くなりました。そんなことで、すいません、今日は3人で伺わせていただきました。

最初に、前にもすでに私の記録があると思いますけれども、大場区長になって初めて、区長が当選して、区長としてみれば、今までの保守的な区政から、本人は革新ということで当選したんだろうと思います。佐野区長が自民党の党員でもあるし、保守系の人でしたから、それが偶然まさかと思ったら当選しちゃったよというのが本音のようですが、当選して、そこで何をやろうかというときに、新機軸を出さなきゃいけない。よくやるのが、いろんな建物を建てる。これはどこの首長でも、何もないところに建てて自分の実績を残したいというのはあるんですけれども、あわせて、自分はなぜか、どういうところから発想ができたかわかりませんけれども、御存じのような文化だったんですね。

その文化について、区の職員もただの一人も文化なんてやったことがない。ただ、やっている仕事は、極論すれば全部文化なんですね。ただ、文化というのを前面に押し出して区政を進めていきたい。そこで、何をやっていいかわからない。多分頭の中には、私が思うのには美術、自分が絵が好きだったのと美術館をとにかくつくりたいというのは根底にあったと思います。そこで、最初にやれと言われたのが絵画展ですね。区民、アマチュアの絵画展と、区内にはプロの作家が大勢いますから、何も絵だけではなくて、絵から彫刻から、極端に言えば書道まで含めて、そういう芸術的なものというか、形、ハードなものではない美術、音楽家もそうなんだろうと思いますけれども、とにかくそういうところを前面に押し出して、そこで区民との距離を近づけていきたいというのが本人の一番の願いというか、考えていたところだろうと思います。

ところが、何をやっていいかわからないんですね。職員も誰もやったことがない。そんなことで、これは何回も言っているかもわかりませんが、私が基本構想の担当の副主幹を企画へ、私と田中勇輔さん[1]と2人で行ったときに、たまたま多摩川の灯籠流しのメンバーが来て一緒に何か手伝ってくれと。ところが、所管がどこにもないん

1　元総務部長

ですね。区長のところへ来たら、たまたま私がそこにいたというので、おまえ、ちょっと担当しろよというか、おーいというので会ったら、細かく言ったら切りがないので、そのままずずっと入っていった。そうしたら、当時の総務課長、これは世田谷区でも名物課長だったんですけれども、このすぐそばに自宅があるんですけれども、「おまえ、灯籠流しをやって、そんなほうも少しやれそうだから文化やれよ」と区長に推薦したら「おまえ、すぐお祭りをやれ」と。俺は馬事公苑の苑長と新年の対談で場所を借りちゃったからなと。4月になって私が任命されて、その8月に「おまえ、すぐやれ」と言うんですね。ここに書いてあるように、年間予算がたった500万かな、とにかくないので、それはいいんですけれども、そんなことでひょんなことから区民まつりをやって、それがきっかけでのめり込んでいっちゃった。

多摩川灯ろう流し（1978）
出典：世田谷Web写真館

そこでもう一つ、ちょっと横へそれますけれども、私が区にいたときの経歴の中で、いろいろと経歴はあるんですけれども、世田谷区に勤めて公務員を卒業して、よかったなというか、印象に残っているというのが区民まつりを担当したことと美術館の副館長ができたこと、最終的に老人会館へ行って老人大学の事務局長をできたこと、この3つは自分としてはすごく印象に残っています。事ほどさように、区役所にいながら区役所の今まであまりみなさんがやったことのないような仕事をやらせてもらえたのがよかったなと。

ということは、多分私は区民まつり、その他の仕事を通じてすごく仕事が楽しめた。自分がすごく楽しんだ。そのことが区民の人にも伝わったのかなと。私がいろんなところへ頼みに行って、どうも私の態度が割合と明るかったというか、何となく相手も、公務員らしくないと言うと語弊がありますけれども、谷亀さんと同じみたいな感じで、割合とざっくばらんだった。私は、すごく自分では真面目でほかを全然見ないというような感じの人間と思っていたのが、どうもそうじゃないみたいな感じで、こっちが楽しんだ分、相手もすごく楽しめそうだというのがあったのか、ずっと協力的で、それ以来、順番にいろんな仕事が、数で言ったら、永山氏がつくってくれた私の手がけた仕事、すごく数が多いですね。

もちろん、一人でやったわけじゃないですけれども、そういう仕事にどんどんのめり込んだ。そうすると、区民のほうも近づいてくる、特に商連との近づきが大きかったですね。商連との近づきということは、店の人というのは一般区民との交流もあります。だから、区民まつりをやって、その中で商店街のメンバーと付き合いが始まった。そんなことで区民との距離がどんどん近づいた。これが考えてみると、今、最初に言った大場区長の文化、本来そこを狙っていたのかなと。

あわせて、区内在住の文化人、相当な有名人がいっぱいいましたね。もちろん、画家で有名な人、音楽家から何からすべてにおいて超一流の人が世田谷区内に住んでいましたので、そういう人たちを割合とこっちへ目を向けさせるようなことができて、そこいらが文化の始まりと同時に、苦労したことと言われたんだけれども、苦労らしい苦労は私はしないで、楽しんでとにかく仕事ができたというところが一番よかったなと。

ふるさと区民まつり（1978）
出典：世田谷Web写真館

区長も、それを喜んでくれて、次から次へと仕事を、区長からも言われたし、こっちからも新しいことを考えて、こんなことをやりたいと言うと「おお、いいよ、やれよ」みたいな、双方お互いが楽しめる。それから、区民も当然楽しみながら、ですから、人と人とのつながりが今までの区の職員だけ、区の仕事だけのつながりではなくて、そういう人と人とのつながりができた中で仕事ができた。もちろん、いろんな人がいましたよ。何事においてもクレームをつけてくるような人もいました。そういう人も付き合っているうちに仲よくなっちゃったりね。

だから、こっちが楽しんでやったことによって、相手も割と胸襟を開いてくれたなということで、多少の苦労はあったけれども、結果としてはあまり苦労しないで、そこを一緒にやってくれたのが永山さんだった。それから、地元には秋山さんみたいな人がいまして、秋山さんは、よくよく考えると私はあまり文化をやったときに付き合いはなかったんですけれども、そういう人がいて、その人たちが発掘できたということだろうと思います。私は取りあえずそのくらいに、時間の関係もありますので、また何かあれば、質問なり雑談の中でいきたいと思います。永山さん、何かつけ足すこと……。

永山　実は、今だから、大場さんは亡くなっているから言ってもいいと思うんですけれども、文化の仕事を私がまとめて区長に書けと言われて書いたのが多分この本[2]だと思うんです。

馬場　永山さんは文章が書けるの。だから、広報にもいたんですよね。私は文章が全然書けないんですよ。

永山　今、馬場さんが言ったことの文化人との付き合いや何かも全部これに書いてあるんです。忖度して書いたものだから、違うのもあるかもしれないけれども、ほぼあとから修正もなかったので、結構補足もして書いているので、文化事業については、もしその本に載っていれば、今、馬場さんが話をしたことの内容がほぼ載っています。

僕なんかが一番思うのは、大場区政になって変わったことは、今まで区民参加というと、町会・自治会の長相手だけだったんですよ。それが町の人をいろんな事業に参加させた。秋山さんもそうですけれども、区民まつりの実行委員、企画委員、そういう形でイベントや何かに区民を大いに活用した。いわゆる堅い話で区民にお集まりくださいと言っても話は出ない。だけれども、そういう祭りだとか文化行事みたいなところで区民参加をやると、すごく打ち解けて話がいろいろ広がってできた。そのことはものすごく大きいなと。それから、僕は大場区長が言ったことで記憶にあるのは、秋山さんなんかもそうですけれども、要するに、区は福祉のことはいっぱい一生懸命やっている。だから、福祉の恩恵にあずかる人のお金は、お金持ち、税金をいっぱい払っている人がいるからできるんだよ。そういう人を大事にしなきゃというので、秋山さんたちは、いわゆる地元の地主さんだから、そういう人たちを大いに活用した。それはすごいなと思った。確かに、役所というのは福祉をやっていればいいかな。そうではなくてすべての人に還元する。そういう気持ちが大場区長はすごかったなと思いますね。そのことが僕は一番大場区政の功績だと。今、昔のことを思い出すことはないので、これを読むと、ああ、こんなこともあったかなというので、もしそこに出ていれば読んでもらいたいと思うんだけれども、あとは、ここで質問にあった中で、先ほどの文化人の登用なんかもすごく積極的に扱って、僕は文化人に対して、いろんな会議に出てくると結構な出席料を払うんですよ。1回、区長に「あれは高くないですか」と言ったことがあるのよね。そうしたら、「おまえ、自分の給料で計算するな」と。もっと重みのある話もあるし、それから文化人と区のつながりにある存在感がすごい効用なんだということを言われて、へへエーッと下がったことがあるけれどもね。あとは、世田谷区のイメージが高級住宅地、文化人の多く住む町、それから緑の多い町ということで、緑の多いという自然環境をこれからも大事にしてもらいたいなと思いますね。

谷亀　ちょっとだけ口を挟んでいいですか。今、馬場さんが言われた大場区政に変わってがらっと変わってきたんだと。そちらに基本計画があっ

2 大場啓二（1990）「手づくりまちづくり」ダイヤモンド社

て、その後、自治法の改正があって、区長公選が復活した。53年に当時の2条に基づいて基本構想という世田谷区の憲法をつくった。54年に基本計画をつくっているんですけれども、ここの各項目の最後の下支えの実現の方策の2番目に、区民参加の拡大を図るというのがあって、そこで言っているのが今お二方がお話しになった、ただ町会長を相手に云々かんぬんではなくてというのが来ていると思うんですよ。もうこの頃、管理職でいらっしゃるし、我々はまだ役所に入る前だったんですけれども、ほかの区に先駆けて世田谷区は、ここで言う住民参加というのをぽんとうたっているじゃないですか。そのあたりの経緯というか、そこがすごく大きいのかなと。それが大場区長ご本人の考えだけなのか、あるいは基本構想だから、いろんな学者とかなんかの意見を聞きながらやられているとは思うんですけれども、これを実現の方策の2番目にばんと上げたというのがすごく大きいと私は感じているんです。そのあたり、もし当時の経緯とか何かがわかれば、あるいはこれは区長のあれだというふうになればそうなりますけれども、そこが世田谷区の当時のすごい特徴だと私は思っているんですけれども、いかがでしょうか。

馬場　まさに区民参加の拡大は、区長は、そういう表現でやったんじゃなくて、とにかく区の行政というか、ざっくばらんに言えば、区の職員と区民とがもっと近づいて、いろんな情報をもらうと同時に、世田谷区をふるさとにしたい、これが一つの大きな構想と言えるのかどうかわからないけれども、頭の中に、とにかく世田谷をふるさとにしたいというんですよ。例えば区民まつりをやれば、世田谷からどこかへ嫁いだ人が、嫁いだ先から区民まつりのときに子どもを連れて実家に帰ってきて、そこで区民まつりを楽しむ。ふるさと世田谷を楽しむ。世田谷はふるさとなんだよというのを出したいというのは何回か聞いています。一緒に飲みながら、いろんなことをやっている中で、そのふるさとづくりの一環で、区民まつりは普通のことですけれども、とにかくいろんなことをやって、いろんな年齢層の人、子どもからお年寄りまで、世田谷に住んでてよかったというところを出したいと。これは今思うと、私は大場区長になって初めて本所というと語弊のある言い方かもわからないけれども、本庁の人事へ来たんですけれども、その前は、当時は玉川支所と言っていたんですけれども、そこにいたときに、佐野区長のつくったこういうものを。ところが、その頃、まだ一職員で、一般職員で、ほとんどこんなのは見ても関係ない、自分の仕事をこなせばいいんだということで、それは一生懸命、取りあえずは真面目にこなしていたつもりです。採用された最初の職場が出張所、それから係長に初めて昇格したときも出張所へ出ていった。だから、区民とのつながりはありました。だけれども、それは窓口を通じてのつながり。そういう中で、こんなことを言っていいのかどうか、議員で原議員というのがいるんですよ。昔、原ポンさんと言われて……。

永山　原秀吉さん。

馬場　そういう人に、みんなの前ですよ。本当にポンプ屋さん、水道屋さんですよ。私が出張所に入ったときに、おーっと言って、二、三回会ったときに、もうすでにおーっなんてかわいがられていたくらい、割合と親しくしてくれた人だったんです。そういう人もたまにはいました。もっと極端なことを言うと、沖縄の最後の何だっけ……。

永山　宮古島?

馬場　宮古じゃなくて、第2次大戦のときの最後の司令長官、牛島中将の奥さんが出張所に来て、日赤奉仕団の団長をやっていたんですよ。私に「馬場さん、これ使って」と言ってネクタイをくれましたよ。さすが軍人の奥さんでしたね。そういう付き合いがありましたけれども、一般区民との付き合いは表面上だけの住民票を取りに来たから、当時、住民票が手書きですかね。考えられないでしょう。一生懸命書いて、途中まで行って間違えると訂正が大変で、余分なことばっかり言っているな。そういう程度の付き合いだったのが、まさに大場区長、大場啓二という一人のリーダー、私は一般の大きい会社でも、土光さんみたいな一人の人間のリーダーシップというのはすごいものがあるなというのはあとへ行ってわかった

んです。意外に、どうせ一人じゃ何もできないよというのが普通ですよ。確かにできないんです。ところが、リーダーシップというのはまた違うんですね。それはただ仕事を指示するんじゃなくて、そういう雰囲気をいつの間にかつくっていっちゃうんですよ。それにしても、一人のリーダーシップというのはすごいの。それは人の気持ちをつかんでいっちゃう、これがどうできるかですよ。だから、区の職員でも、町なかへ出ていったときに、どうやって入り込むというか、自分が入り込もうとしているんじゃなくて、どうやったら相手の気持ちと一緒になって仕事ができるかというか、楽しめるかというのが一番の。だから、そういう中では一人のリーダーシップ、私は、区長は長島壮行さん、佐野保房さん、大場啓二さん、3人ですけれども、いつの間にか引き込まれていっちゃうというか、いつの間にか、この人の言うことならと聞いていっちゃったみたいな。それまでは区長なんて会ったことがないんですよ。辞令をもらっただけですよ。

ところが、大場区長になってから近づけた。課長級になりましたから、しかも企画にいたから、しょっちゅう区長とは会っていました。そういうのもありますけれども、いつの間にか、一人のリーダーシップがいかに大きいか。それは町なかでいくと秋山さん、この人のリーダーシップも、いつの間にか人を巻き込んじゃっているんですよ。みんな黙ってついてきちゃうんですね。何なんだろう。意外に一人のリーダーシップというのは、リーダーシップを発揮しようと思わないうちに、いつの間にか人を引きつける。みんな、それをわかって、どんどん文化行政をやりながら区政がだんだん区民と近づいていった。

だから、基本構想・基本計画って私も最初は担当でやっていましたけれども、実を言うと、今思うとつまらない仕事をしていたなと。みなさん、研究所をつくっているのに怒られちゃいますね。そんなことを言っちゃいけませんけれども、私は、文化をやれと言われてから、自分が生き生きとして仕事していたように思います。余分なことを言ったんですけれども。

そういうことで大場区政になって、多分区の職員も、二、三年たってから文化の仕事をやりたいという職員も、人事異動の希望で何人かあるよというのは人事から言われたこともあります。そのくらい、一人のリーダーシップというのは大きいなという気がしますね。

箕田　30年間の疑問が解けました。大場さんというとお祭り区長だと言われて、ちょっとみなさん、にこっとされるようなところがあるんですけれども、その中に一番最初にあった一つの家族でもないんですけれども、一緒に同じ場所に住んでいたわけじゃなくて、何か引きつける手段の大きなところが、ここに言う区民の参加なんだと。俺たちは立場が違うではなくてというところが今初めてつながりました。ありがとうございます。

馬場　私の感じた一辺、断片だと思います。

馬場秀行氏

秋山　世田谷の玉川に住んでいます秋山と申します。長生きし過ぎたために、いろいろ弊害も出てくるし、ぼちぼち人生をやめようかと思っているんですけれども、その間にすばらしい世田谷区民というか、全般的にいろんな大勢の方と接して、いい人生を送ってきたなと本当に感謝というか、いろんなことを勉強させてもらって、また自分は自分の考え方をまとめてアピールすることができ、我慢することもでき、そういうことを与えられたというか、いろんな立場からして非常にありがたかったなと思います。間もなくこの世を去りますけれども、今日は忌憚のない話を簡単に、この間、打合せのときにお話があったことと重複することはいくつかありますけれども。簡単にい

ろんなものを見せていただくと、昭和22年に歴代副区長になった渡辺三郎さん、この方は田園調布の町会長をやっていらっしゃった方だと思うんですよ。僕はお葬式にも行ったけれども、消防関係の方で、ここで亡くなったんですが、中島飛行機という会社にいた方で、日本がロータリーエンジンをなぜ研究したかというと、世界でロータリーを完成させたのはBMWと中島飛行機、今のSUBARUの2つの会社しかなかった。

なぜかというと、背面飛行といって飛行機が背面、背中になって裏返しになったままいつまで飛べるか、何分間飛べるかということのオイルの潤滑ができたのはドイツと日本だけだ。それにこだわったのは中島飛行機であり、今のSUBARUであるということを聞いた。渡辺さんも同じようなお名前だけれども、かなり長生きされた。絵を描かれて、この方の絵が多分今の玉川消防署にもあるんです。

いろんな方をずっと見ていくと、話せば、ああ、この人のかみさんは長野の山奥だとか、いろんなことがわかっていくし、変なところでいろんなのが出てくるんです。

先ほど大場さんのお話が出てきたんだけれども、言いにくい話も僕も言ったし、向こうも忌憚のないことを、おまえ、どうすればいいんだと言うから、どうすればいいということは、いろんなことを知るということで、世田谷というのはいろんな雑多な人間が大勢住んでいるんですね。言葉で言うと適切ではないんだけれども、民族が違うよと。簡単に言えば、新宿へ出る人間と渋谷へ出る人間と大井町へ出ていく人間、鉄道が貧しいんですね。JRが通っていない。そういうことを考えたときに、それぞれが都心へ行くのにどうやって出るか。それから、飛行場へ行くときにどうやっていくか。

世田谷は今、九十二、三万の人がいるのだと思うんですけれども、どういうふうな形でここの世田谷の区民がいるのかということを考えたときに、考え方がそれぞれ違うから、まとめていくのがとてもじゃないけれども大変ですよ。多民族ですから、アメリカみたいなユナイテッドステイツなんていうのは、全部各州によって違うと同じような、そういう民族が一緒になっているところで、これだけでかいのをまとめていくのは、どの方にも、歴代の区長さんじゃないけれども、長島壮行さんとか佐野さんもいらっしゃっていますね。大場さん、熊本さん、保坂さん、どなたも受付を通さなくていいから、じかに俺の部屋へ入ってこいと言われるぐらい、いろんな忌憚のないことを言わせてもらったんです。

その中で一番基になっていたのは、多分うちを出てきたときに家族、これはオフレコではないけれども、どう見てもそうだよということを家族から言われたんですけれども、旧地主、僕は原住民と言わせていただきたいんですが、比較的豊かな生活をしている原住民、この人たちで、世田谷には温郷会という会があって、前は40人ぐらいいて、今でも支所にもいらっしゃいますが、この人たちは全部大正以前の生まれだ。そして、入会するときは、一人の反対でもあると入会できない。会長は要らない。幹事2名、そしてこの幹事2名が絶大な権限を持っているということがありまして、そのときに、長島壮行さんというのは長島ノリトモさんのお父さんだと思うんだ。その方も当時メンバーで、私は若いほうのメンバーだった。父の代わりにもう出たんですけれども、この会はいい会だな、俺を仲間に入れろと大場区長は盛んに言われたんですよ。

それは忌憚のないことを言えるという立場の人たちから倣ったんでしょうけれども、いわゆる政治的なものはあまりなかった。公共的なものに注目というか、気になることをやっていたグループの会だったんですが、この会が今、若返って昭和温郷会となっているんですが、でも、栄枯盛衰があるように、非常にうまく回転しているとは言えないので、今ちょっとお休みはしているんですけれども、一応そういう会があって、それが「おい、どうだ」というときに、御意見番じゃないけれども、そういうメンバーが外郭団体というか、何も政治色は全くないところであったということで、その仲間のお手伝いも私はさせていただいたということです。

今、外環道のPI、パブリック・インボルブメントと言いますけれども、日本語で訳すと公的なものに関与する委員であると。一般の方よりランクがちょっと上なんですね。この外環道は、また今月委員会をやるんですけれども、杉並の手前でストップしちゃっている。これはどうするんだということで、私は爆弾発言じゃないけれども、中央道の下り線を開けてください。上り線があれだけ開けるのに時間がかかったのに、下り線が開かないでしょう。それから先の大泉が、もう先がわかっていないんです。

そういう状態のときに、いいからみなさんのために開けてくださいと。それから瀬田から多摩川を通って大田区へ行って羽田空港へ、世田谷のみなさんはどういうふうに空港へ行っているかということを考えたときには、やはり外環道はしっかりと計画してやるべきである。世界のどこの都市をとっても、残りが少し残っているというのは日本だけなんですね。ロンドンでもニューヨークでもパリでも、全部が二重、三重、八重という形で環状道路ができているのに、東京だけが一部できていないというのは、これも一つちゃんと主張すべきときに主張、空回りにはなります。

だけれども、そういうこともやりたいなというんだけれども、大場さんのときに「大場さん、世田谷にないものがあるよ」、90万――当時は80何万人ですが、これだけ住んでいて、JRの指定席の切符も買えないんだよ。みんなよその区へ切符を買いに行く。これは何とかならないですかと言ったら、「おお、そうか、そうか、本当に買えないのか」と言うから「買えないですよ」と言ったら、それじゃ、JTBに行って端末機に入れれば、今は電線がつながっているから切符が買えるじゃないですか。しばらくしてから玉川の高島屋で国鉄の切符が――その当時は国鉄ですよね。そのほうが詳細に通じたんだけれども、切符が買えるようになったということ。

その前に、事情があってお辞めになった大島さんという方がいらっしゃったときに、世田谷区役所に郵便物を出すときに、世田谷区世田谷4丁目27番の何の何とみんな書かなきゃいけないのに、NHKは郵便番号だけで、例えば何とかの歌係とか係だけ書けば、郵便番号だけで行くじゃないですか。90万近くいる区民のところで、一々世田谷区世田谷5丁目とか4丁目とか、それを書かなきゃならなくて、あれは郵便番号というかZIPコードというか、そういうものを早いところ、世田谷はこれだけいるんだから、郵便番号だけで済むように、当時のときは3桁プラス2桁になった頃だと思うんだ。枝番がつけば、世田谷区でなっている。NHKは使っているということがわかったんです。NHKの何とか係というのは係だけ書けば、郵便番号で全部行く。それを何とかやってくれと。

もう一つ、田園都市線というのが地下鉄になって通ったときに、桜新町の駅前、地下鉄の駅前なんだけれども、古い不便なところに2か所、郵便ポストがあるだけで、電車に乗って、昔のままで自分の通勤ルートにほとんどが郵便ポストはないんです。これも大島さんが苦労してくれたんだけれども、結局、郵政省の考え方って何なんだろうなと思うんだけれども、集配人が車を止めて、ポストを開けて集配するのに駅前では具合が悪い。やりにくいからと言うから、ちょっと違うんじゃないのと言って、需要と供給の問題と同じように、違うんじゃないのと。

もう少しと言ったら、案の定、桜新町の場合には小泉さんという金物屋さんの真ん前なんだけれども、俺の家はたばこを売っているけれども、最近は切手とはがきを買いに来る人が多くなっちゃって大変だということを言われていましたけれども、それもたまたま国のつながる人がいるんだけれども、それとは関係なしに、地下鉄の潜る前に郵便ポストのいいのを造ってくれと言ったら、まさに一番新しいタイプの台風のときでも水も入らないような大きな投函できるいいポストができていて、よかったなということもある。

それから、後の区長さんになっていったんだけれども、区の庁舎を建て替えるというときに、建て替えるときの図面が、これは昨日できた世田谷の区民まつりで、私が企画委員長を最近やっていて、その途中から実行委員長さんは大場代官様が

やっていたり、都議会議長の河野一郎さんがやっていたりしたときに、河野さんが病気がちだったもので、企画委員長をやっていたら、おまえがやれと言うけれども、やれといったって、企画委員長というのは野球で言えばキャッチャーとピッチャーの違いがあるんだ。立場が違う。このときは、お客様が来なくてもいいから、けががないようにということだったんだけれども、このとき、吉越さんだっけ、酔っぱらって……。

馬場　増村（荘太郎）助役。

秋山　増村さんか。

馬場　腰を折っちゃった。

秋山　舞台からおっこっちゃってけがしちゃった。骨折しちゃった。それは内々だからよかったんだけれども、けがさえなければ、いいお祭りをやりたいなと。とにかく人が来なくてもいいから、事故がないように、事故がないようにという考え方を持ちながら、区民に楽しんでもらうにはどうしたらいいか。よし、子どもが来れば親がついてくる。おじいさんがついてくる。子どもを寄せようといって、奥のほうにいろんな竹細工だとかサッカー。サッカーなんて小さい子に手間を割けるようにすると、親からおじいちゃん、おばあちゃんまでついてくる。だから、そういうことをやろうよという形で大分こうなっていったんですけれども、なかなか難しい。

同じようなことを下北沢でも、そういうふうな苦労をされたということで、全体的に見るには、世田谷といっても地図であった、そして谷亀さんに渡したんだっけ、玉川は世田谷区から独立しようと。

昭和23年、たまたまうちにあった変なチラシを捨てようと思って見たら、玉川区は独立しようという運動のチラシが入っていた。

馬場　議会で陳情か何かしたんでしたっけ。

秋山　そのときに独立したのは練馬区なので、同じ時期に。板橋区から練馬区が昭和23年に独立したんだけれども、練馬区のほうが面積が広いし、区政はどういうふうになっているのかなと思うんだけれども、玉川だけは独立しようといって、そうすると、その後、どうなんだろうなという話を冗談にすると、うちのほうも玉川に入れてくれよとか、鎌田とか宇奈根とかはこっちへ来る。弦巻だとか、あの辺もそっちへ入りたいよということが出てくるのだろうと。そうすると、今の玉川の区民じゃおさまらないよという話もありました。

ただ、そんなようなことは言われたけれども、そのあとに一つの役所が分かれたんだけれども、あれがベストなのか、ベターなのかわかりませんが、とにかく一緒くたになっちゃっているし、そういうことでコントロールするのが非常に難しい世田谷区ですから、みなさんのほうも、特に私が関係した緑関係なんていうのは、いろんなセクションが土木から公園から緑から、どっちかというと、ばらばらになったような行政なので、あれは何か統一しないかなと。

それはうちの扱いじゃありませんというようなことが出てきて、東京都の観光地の百選の昔1位になった等々力渓谷、玉川支所に問合せがあるらしいけれども、いや、あれは違いますということを東京都のほうでも言っているらしいし、こっちでも標識があるというぐらいしか言わないんだけれども、手入れの問題もあるんでしょうけれども、そういう区全体のことでいろいろ区長さんは、その時代、その時代にいろいろ苦労された。

谷亀さんあたりは御存じだろうけれども、第二山手線は認可になっていて、一部着工して造ったのが今は遺跡で残っているはずなんですが、それはそのまま申請した人はどういうあれか、当時は京急、東急、京王帝都が一緒になってやっていた西南私鉄連合というのがあって、それの一部に東急に入っていたんだけれども、それだけの人たちがやって、それにJRは調整として入ってきたんだけれども、許可は得たけれども、そのまま取消しはしないまま、そのままペンディングになっているみたいで、もうできないでしょうね。

あと、いろんなことでメトロセブンとエイトライナー、お客さんがいないと思う場所に造ったって、お客さんはそんな簡単には来てくれない。維持費も大変だし、それもどうかなということは、私もそういう意見だけは言わせてもらった。

それから、大場さんにこだわるわけじゃないけれども、大場さん、あなたは畑を耕して種をまいて実らせて、稲刈りまで、刈り取りまで自分でやろうと思う、もういいよということで、御自分のことで健康もあるし、いろんなことであとの人に任せちゃったらどうということは言ったんですよね。だけれども、まだ残れというから、いや、稲刈りだけは次の人にやらせてやったほうが僕はいいと思うなという意見だけは言わせてもらったんですけれども、大勢のいろんな方がいると、やっぱりこれだけのことをまとめるのは大変なことだろうなと思うんです。

区民まつりのことで来たんだけれども、このときにも言ったんですね。馬事公苑という場所は、世田谷区は先住民と移住民と両方でしょう。そのときに、最初は馬事公苑を入れた地図と普通の地図とがあるから、南北が逆になっているのが緊急時の避難場所だとかトイレなんかが、ページによって逆向きがいっぱいあったんですよ。今度もちゃんときれいになってはいるんだけれども、せっかく端っこで、地図でこんな空いているところがあるなら、小さなところでいいから、こういうところにちょこっとでいいから方位をちゃんと書いてほしいんですよ。邪魔じゃないでしょう。

方位に関しては、建築のときの閲覧できるところで、世田谷区の広報がやったときに僕は来たんだけれども、建築、設計、建築施工業者が書いた図面が掲示されている。だから、広報、今どなたがやっているのか知らないけれども、真ん中へ通っている道がどの道なのかわからない。方位ぐらいは質問できると思ったら、私たちは答えられませんと言うから、図面で何がどこにあるかぐらい答えられませんって、そういうものなのかよと僕はあきれちゃったんですね。

だけれども、そういうチェックというか、誰かが親切に、国士舘大学がここにあるから、こっちが多分北ですよと言ってくれた人がいたんだけれども、そこまで箝口令がしかれているのかなと思ったけれども、見せるためにあるべき図面が北も南もわからない。5つぐらいあって、2つぐらいは方位がない。だから、どういう位置へ、どういうふうなのか、見せるために、旧道路をわざと入れておくとか、そういう親切心が非常にないですね。

特に建築とか、うちのトラストもそうなんだけれども、外部の知らない人がいちゃもんをつけて入ってくるからなんだろうけれども、これより先は立入禁止だというようなことで、建築なんかも特に許認可が絡むところは、本人が水道とか建物の申請書を持っていったときと業者が持っていったときとは態度が違うので、これは施主さんに聞いて何とかだと、施主は俺だよと言うと、がらっと態度が変わっちゃって、これはお客様で、逆にお茶を持ってきてくれそうなぐらい変わるんだけれども、土木関係とか、ああいうあれは非常にお役人というか、寂しくなるね。

だけれども、そうじゃない人たちがいるからあれなんだろうと思うんだけれども、これは元総理の話じゃないけれども、非常に難しい問題なんだけれども、許認可のあるものが業者相手でまず当たり前になっちゃっているから、本人が行ったときにはがらっと変わっちゃう。私が本人なんですけれども、ちょっと困ったと言うと、がらっと親切に変わるけれども、やっぱり官庁ってしようがないのかな。そういう感じはするんですけれども、いろんなことがあって、いろんな人と出会えて非常に楽しい人生を送らせていただきましたということでございます。

秋山光男氏

秋山　玉川独立の写真を見たんだけれども、これなんだよ。俺の後ろにあるこれよ。読めなくて、

昭和24年に耕地整理事業、耕地整理組合のナンバーツーだった人が、向こうは独立して、こっちは吸収かよというのですごく怒って、10万玉川区民が総決起しようということがあって、これがあるので玉川地域ってすごく……。

馬場　読んでいないんじゃなくて、読んだけれども忘れているか、また逆に内容はほとんどわかってはいるだろうとは思います。読めば、ああ、そうだと思い出して。だけれども、それは記録として残っているわけですよ。こういう本があるし、さっき私だとか永山さんが話したような話は、ある程度前にも話したし、どこかに記録として残っている。秋山さんの話は少しずれているかもわからないけれども、それはそれなりにいいとしておいて、果たしてみなさんのお役に立てる話になっているのかどうか、ちょっと疑問というとあれなんですけれども、どうなのかなと。これでいいのかなと。

古賀　苦労された話も聞かせていただきたいなというのがありまして。

馬場　確かに、いろんな事業をやっていますから、苦労話というのはないとは言えません。例えば極端なことを言えば、初めての区民まつりで神輿を各町会から出してくれと。そうしたら、あの近隣の世田谷の町会、それから用賀の町会、馬事公苑に隣接している町会が神輿を出してくれたんですよ。

そうしたら、出した町会長が馬事公苑って本当に夜中は誰も入ってこないのかと。テントの下に3基だか何基か、第1回目のときは永山さんはいなかったんだよな。大事な町会の神輿、またすごくいい神輿なんですよ。何か事故があったときにどうするんだと言われて、じゃ、しようがない、馬事公苑に泊り込もうといって、男性、女性も一緒に泊まっちゃったかな、芝生の上には寝られないから椅子の席のところに、ほとんど寝てはいないですよ。神輿を見張りながら、神輿は入口付近に置いてあったから、誰か入ってこないか見ている。そんなことで警戒しながらやっていた、苦労と言えば苦労なんだけれども、これがまた楽しい話でね。

あそこへ文化事業の何人かが泊り込むと言ったら、代官屋敷の通りの奥のほうの肉屋さんかな、町会長、私の話にも出てくる人だと思うんですけれども、「何だい、それじゃ大変だ、俺がバーベキューのセットと肉を持っていってやるよ」といって、多分いまだかつていないんじゃないかな、馬事公苑のあの馬場で夜中にバーベキューをやって過ごしたこともあるんですよ。ただ、そのときに苦労と言えるかどうか、アブ、とにかく蚊じゃないんですよ。刺されるとすごい跡が。それが苦労と言えるかどうか、今思うとむしろ楽しかった思い出の一つ。

それよりも苦労したというのは、いつの世でも同じだけれども、人間関係ですよね。事業を進めていく上で、なかなか進まないとか、うまくいかないという話の苦労というのはいくらでもあるけれども、一番の苦労は人間関係、そんなに思い出はないんですけれども、商店街の連中からいろんなクレームが来たりとか、今言ったように、町会から泊まり込みでとにかく警備しろだとか、もっとあれだったら、さっきの秋山さんが区民まつりなんかに、本当は露天商が出るともっとにぎやかでいいんだけれどもといって、区が露天商を頼むわけにいかないわけですね。そんなことがあって露天商は一切出させないとやっていたら、いつも世田谷通りの並木の入り口のところで俺は店を出しているんだ、どうしてくれるんだと来たんですよ。

秋山　店はちょこちょこっと開いて30分間かそのくらい、あれっと思っているうちに場所を引っ越したり、やめちゃったり、あとはハプニングか何かがあったときに、協賛金みたいな形で募金箱を持ってうまく回る人もいるし、これはなかなかね。今でもそういう人はゼロじゃないですね。

馬場　だから、苦労というほどの苦労じゃなかったのは、区民まつりはそんな話もあったとか、ほかで今言ったような人間関係で、何をやったにしてもなかなか協力してくれなかったとか、協力してもらっても、なかなかこっちの思いどおりにいかないとかというのはありますけれども、思ったほど私のやっていた大場区政の文化行政については、それほどでもない。だから、今言ったように、

人間関係と同時に、大物の文化人の人がなかなか応じてくれないのを引っ張り出してくるみたいなときに、ちょっと苦労したとか、そういうのは若干ありますけれどもね。だって、井上靖さんみたいな人を引っ張り出すというのは一筋縄ではいかないですね。

これを引っ張り出したのが永山さんもよく知っている当時の総務課長、この人がまた特異な人間関係をつくるのがうまかったというのか、誰のところへでも平気で一人で行っちゃうんですよ。ただ、一区民として行ったら、相手は絶対警戒して会わないですよね。これはよく言うんですけれども、世田谷区何々課長、何々係長という名刺の肩書のすごさというか、相手が安心する。これは会ってくれるんですよ。区役所というのは、昔から言う堅いとかまじめとか、ちゃんとしているとか、でたらめしないとか、お金の要求は一切ないとか、そういう何かがあるんでしょうね。安心してくれるの。

だから、そのときに私は、少し話がずれますけれども、世田谷区企画部副主幹という名刺は世の中に通用しないと思っているの。世田谷区企画部何々担当課長とか何とか課長、課長、係長という名刺を持っていないと、副主幹という名刺で一回東電の人と話していたら、ああ、世田谷区の副主査さんですねと。向こうは私の位置がどういうところか、名刺はできればわかりやすいほうがいい。それがものすごい信用というか、相手が安心する、これは言えますね。

だから、苦労らしい苦労というのは、そういうつまらない、小さいところではありましたけれども、世田谷区という看板じゃないけれども、肩書をしょったときというのは、いかに相手が安心して話を進めてくれるのか。と同時に、それには世田谷区の職員としてでたらめをしたら絶対だめということですよね。もちろん、しませんでしたし、役所の信用というのは絶大ですね。これはもういろんな意味ですごく大きいものですよ。当時、私は前回やっていましたと誰かのところへ行ったって、肩書がなくなったらもう相手にしてくれないですよ。親しくなった人は別にしても、とにかく苦労といえば、そんなところで苦労と言えるほどの苦労じゃないです。

だから、文化事業でいろんなことをやったというのは、私、公務員生活の中でものすごく自分としてはよかったと。さっき言ったように、区民まつりを担当したこととか、美術館の副館長をやっていた、そういう仕事ができたことは、企画の基本構想担当の副主幹でいて何かやらされて、そのままいたらずっとそっちのほうでやっていたら、あまりいい思い出がなかったんじゃないかなと。こんなことを言っちゃいけませんね。ごめんなさいね。

そういう人と人とのつながりが、世田谷区の肩書を持っていたことによって、肩書じゃない、世田谷区の職員だというだけで、すごくいい人間関係がつくれていった。それには相手が来るのを待つのではなくて、こっちから飛び込んでいく。相手の何かをきっかけに、とにかくざっくばらんな話をしながら進んでいくと、たまに区民に言われるの。あんたは公務員らしくない、役人らしくないなと。だから、おまえと付き合うよ。おれは役人が大嫌いだと。そういう人もいるんです。そのくらいね。

秋山　ちょっとお尋ねしたいんだけれども、5つの支所に分かれていたでしょう。きっかけはどういうあれだったんでしょうね。

永山　それは、要するに世田谷区が80万という都市であまりにも人口が多い。大場区長は政令指定都市を目指すと言っていたんですね。というのは、80万を1か所の役所で処理するというのは大き過ぎると。だから、政令指定都市みたいに区にすれば、それぞれ権限をおろして、仕事が早くできるのではないか。だから、5つの支所にそれぞれ責任を持たせるということで3層構造にしたんですね。要するに、役所に言わないと何でも話が通らないというのは区民から見れば遠過ぎるわけですよ。支所に行けば話が通るといえば、近くなるわけですね。

秋山　ところが、裏返すと、そこに行くと、ああ、それは本所の扱いですというのが結構あるんですよ。

永山　だから、まだ機能がしっかりしていないのだろうと思うんだけれども、そういうことなんですよ。できるだけ身近なところで行政をやるということでね。だから、今、90万だけれども、その90万の人口を1か所の役所が全部処理するというのはあまりにも大き過ぎる、地域行政というのはそういうことなんですよね。一時は土木や建築も支所におろしたんですね。結局、引き揚げちゃって。

秋山　やっぱりそうなんですね。こっちの勘違いじゃないんだ。おかしいな、おかしいなと思っていたの。

永山和夫氏

箕田　当初は、各支所をミニ区役所みたいな感じで、身近なところで何でもできるというところで、出張所に行けば何でもできるというようなことをイメージしていたみたいなんですけれども、景気が悪くなったりとか、公務員の数を減らさなきゃいけないとか、いろいろ状況が変わってきちゃって、それはしようがないから、最小限のものは本所に引き揚げようという見直しをやって今の状況なので、おっしゃるように、昔できていたことができなくなったことが今はあると思うんですね。

永山　あれで私が苦労したのは、私が総務課長のときだったかな。総合支所にそれぞれ土木や建築もおろすということで本所が空いたわけですよ。だから、本所の周りに借りているビルを返したんです。返したのに戻ってくるって、帰るところがないじゃないのと。あのときは平谷さんだったかな、文句を言ったことがあるんです。何を今さら帰ってくるといったって、もうビルはみんな返しちゃいましたよって。できるだけスリムにするということで、余計な金は出さないということで。だから、唯一残ったのは何か所もなかったかな。ほとんど返したと思う。

秋山　総身に知恵が回りかねという言葉があって、だろうと思うんだけれども、ちょっとお話ししたけれども、タクシーに乗って「世田谷区役所」と言うと「区役所ってどこにあるんですか」というのは、こんなに90万人もいるところで「区役所はどこですか」ということでしょう。今度、通ったところが、道路が区役所西口通りでしょう。これで明大前まで、山手まで通じるんだけれども、明大前で下りて、例えば駒沢公園通り、ああ、オリンピックをやったところ、あんなところにここから行かれるのという発想が出てくると思っていない。区役所西口通りとつけたというんだけれども、そのときに僕は、投書のときにわかりやすく書いたんですよ。不忍通り、明治通り、東京はあれがはるか向こうまで行っているんですよ。不忍通り、明治通りというのに延ばすような道路にならなければ。だから、そういうことで、ちょこっと直そうと思ったときに、区役所西口通りになっているんでしょう。

もうじきまた名づけが決まると思うんですけれども、はっきり決まるのは多摩川の等々力大橋、この橋がもう工事が始まっているんですね。ですから、これも今、仮称となっているんだけれども、等々力大橋に多分間違いなくなると思うんですね。ただ、三宿のところ、都道26号線ですか。

馬場　26号。目黒の私の家のすぐそば、武蔵小山のほうからずうっと来るんですよ。26号線です。

秋山　等々力大橋、第三京浜があるから、第三京浜でみなさん使っていたけれども、この道を真っすぐ行くとどこへ行くかというと、先のほうはできていて、何と新横浜の入り口にどんとぶつかっている道路があるんですよ。あの道路がこの道路なんですね。この道路、この辺に新横浜のホームがあったって、真ん中にぶつかっているのがこの道なんですよ。だから、弦巻の図書館のところ、バスの車庫があるところ、あの道を真っすぐ行く

と下高井戸、下高井戸の踏切があるでしょう。踏切へ行く道なんですね。

だから、そういう進まないというか、みなさんはお若いからいいんだけれども、将来に向かっての構想、外環道をとにかく先に行かないと、今は瀬田の交差点が混んじゃっていてしようがないでしょう。我々、環八の内側の人は、どこで環八を横切って二子玉川に行こうかと、みんな考えているはずなんですよ。毎回あそこは渋滞しちゃっているので、これが間もなく――間もなくじゃないな、まだ10年はかかると思うけれども、開通したらもっとひどくなっちゃうので、今から先のほうへ吐き出して、少なくとも第三京浜にぶつければ、まだ何とかなるの。第三京浜をなぜ環八にぶつけたかというと、その先が渋滞を起こすからということで、美濃部さんの時代にわざと丁字路にして、そして瀬田を越えて首都高へ、片や目黒へ行って首都高へ乗ると、わざと分けたということ。

もう一つ、同じことが僕ら道路関係者はよく言うんだけれども、首都高10号線というんですけれども、関越道路を真っすぐ行けば目白通りの上を行って首都高にぱっとつながるわけなんだよ。なぜあそこの環八のところで止めちゃったか。首都高10号、10号とあだ名みたいに言っているんですけれども、10号を造れよ造れよと今でも言っているんだけれども、そういう形からいくと、将来のことを考えたときに、もう少しいろんな意見、言ったってしようがないよという人ばっかり、いわゆるサイレントマジョリティーというか、沈黙の多数ですよね。その人たちは何を考えているのかなというのを酌み上げてほしいなということを思うんですよ。言ったってどうしようもならないやという形になっちゃうのが残念だと。小さな声でもあればいいんだけれども、酌み上げるところが一つもないという寂しさ。

僕もわからなかったけれども、建築関係だと思ったんだけれども、今まで相談していたところの窓口が各支所に、砧支所、玉川支所と分かれていて、同じような相談に行ったら本所へ行けというふうになっていったので、じゃ、僕の聞き違いかなと。いや、今までそんなことはなかったんだと。だけれども、それと同時に、違法建築だと思うんだ。建築専門じゃないからわからないけれども、違法建築と思われるもの、今、造るのが速いじゃないですか。1か月ちょっとぐらいで住める家がぱんとできちゃうような状態になっているのは、ちょっと陰で見張らないと、いつの間にかできちゃっているというのが相当あると思うんですよ。

だから、違法建築というか、そういう形の下で進んだりして、環境悪化というか、防災面でも決していい状態ではないので、そういうところは何とかして防げるような形をというふうになってほしいなと。今月末にまた外環道の大泉のところの工事を再開するかしないかとか、造るのは間違いないんだけれども、その問題もあって、そのときも僕は言ってみようと思うんだけれども、将来に向けて、次の世に向けて残すべきものは何だろうというところ、先のことも考えてやってほしいなと思う。

それから、大場さんの悪口を言うわけじゃないけれども、二子玉川の玉川高島屋の駐車場の3階に、今の新しい246が接続するという芽がいっとき出たはずなんですよ。それが廃止になっちゃった。廃止になっちゃったんだけれども、結局、そのときの賠償金というか、どういう形になったのかわからないけれども、むにゃむにゃとなったまま廃止になっちゃって、走られるとわかるけれども、多摩川の上を、ああ、だろうなと思ったときに、左からぐうっと上がってくる道ができていて、そこが閉鎖になっちゃって止まっているんですね。下方を歩くと、あれっ、何だろう、これはと。滑り台が登っていくみたいな道ができていたので、それが全部使っていないでしょう。

もう一つ、どこが金を出したのか知らないけれども、環八のすぐそばで第三京浜の下にトンネルがあるんですよ。

秋山　矢沢川の最後の口ですよ。

ここのところにしっかりした車のすれ違える6メートルぐらいのトンネルの道ができて、それで図面を見ているんだけれども、そこにホームレス

が住んじゃったからってふさいじゃったんだ。これは板垣（正幸）さん[3]がやったんだよ。板垣さんが、俺がやったんだと言っていたから、結局、それをこじ開けてまた入っちゃった。何回もあったので、今度は相当な機械でも持っていかなきゃ壊れないぐらい、しっかりしちゃった道だけれども、廃道になっているんだよ。ここの環八のすぐ外側のところに下を通れる橋がある。みんな知らないだろう。

馬場　知らなかった。

秋山　玉川支所の人も知らないんだもの。行ってみると、あれっという場所ですよ。だから、一生懸命やっているんだから、もうしようがないんだけれども、そういう結構無駄もできちゃっている。二子玉川なんかは特にちょっと恥ずかしい、お粗末なんだけれども、みなさん、口を拭っちゃったからわからないんだけれども、あの件はどうなっているんですかと言いたくなっちゃう。

二子玉川の風景（1965）
出典：世田谷Web写真館

箕田　先ほどのサイレントマジョリティーの話なんですけれども、大場区政になっていろいろお祭りとか住民との距離を縮めて、サイレントマジョリティーの世田谷のそういう小さな声というのは区長に届くようになったんですかね。そこはどう思われますか。

秋山　ただ、僕が外環関係で出たんだけれども、大泉までの決まった起工式に、八王子の市長も圏央道の問題で出なかったけれども、世田谷区長は、もっとも外環道反対で当選された方で、一番初めは地面の上を平らで行くべきところで計画されたんだよ。だから、三鷹なんかは駅前広場を造る予定で買収しちゃったり、それから堅牢な建物は建てられないよということで、それでもいいんだなと言って不動産屋が土地を売買した。ところが、いつの間にか地下40メートル以下は個人の私権が及ばないというルールが変わったでしょう。

そんなものだから、途中で買収したって、よくしようと思った町が大分駄目になっちゃったところがあって、全体的に見れば、知らない地下を勝手に掘って――勝手にじゃないけれども、掘っていけば、そのほうが安くて黙って地元にできるのはわかっているんだけれども、それを当てにして買った人と、それからそれをやっていた市、気の毒なことにバス路線まで考えていたところが大分駄目になっちゃったわけ。ここでまた外環道の話をしてもしようがないんだけれども、それを国土交通省が調整すべきが、今度は東日本道路、NEXCOジャパンというのかな、そっちへ投げちゃったんですよ。

初めは、東京都がその次の窓口だ。その窓口が今度、業者に窓口を投げちゃったっていうことだから、前に言った約束事とは全然違うんですね。何だ、あなた方はと言いたいというんだけれども、とにかく国交省は逃げちゃったというような形だからね。今のできている部分は、関係者の方はいつでもインフォメーションルームがあって、センターがあって、見学できるようになっていますから、そこら辺でどんな貝殻が出てきたとか、遺跡が出てきたとか、今ここまで行っているとかというのは、全部見たいというもしあれだったら申し出ていただければ、用賀の事務所に行って、区の関係でと言えば、あれだけの強力な土木をやっている、四、五十人いるのかな、8割方は女性ですよ。ほとんど男はいません。

若いみなさん方は、彼らは重機をコンピュータで動かしてやっているから、男と接することはまずないと思うの。びっくりしちゃう。すごいものですよ。そうなんだろうけれども、もうそういう時代になってきちゃったのかなと。そのかわり人を助けに行ったり、助けに来られたりするためには非常に大事な道路ですから、ぜひ賛成してほしい。

もうあまり言う人はいなくなるんだけれども、

3　元世田谷区副区長

一本柱が、T字型の高速道路というのは、阪神・淡路大震災のときにひっくり返っちゃった高速道路が1か所、もう1か所は羽田から新橋に来る間にもう1か所、もう1か所は渋谷から三軒茶屋――用賀かな、この間は一本柱の上に往復車線がくっついている、上にのっけてあった。これは一番危険な高速道路なんだけれども、この高速道路は将来当てにされないよとわかっている状態なんだけれども、下に一部地下鉄が入っちゃったから、田園都市線が入っちゃったから、どうするのかわからないけれども、一番危険なところが東京には2か所、関西に1か所、1か所はすでにつぶれて直しちゃったけれども、こっちにはまだ世田谷には危険なところが少し残っていますよと。本当はコの字型のものを、足を2本下ろして、その上に造るべきだったんだよ。

それから、右折レーン、三軒茶屋の世田谷警察もそうだよ。上馬もそうですね。右折する車が初めからたくさんあるとわかっているのに真ん中に柱があるから、狭めちゃっている。あれは金をかけても元へ戻すべきだというか、右折車のためには。そういうふうに思うんだけれども、あまりそういうことを言う人はいないんだけれども、本当に声を大にしてやっておいたほうがいいだろうなと思うんですね。

馬場　私、これは全部まじめに読んでいません。「世田谷区における小さなまちの拠点の形成」[4]、いつできたのかわからないんですけれども、いや、すごくいいことをやっているなと。まさにサイレントマジョリティーじゃないけれども、いつの間にか、そういう人たちの声がこういうところを通じて上がってくるという点では、こんないいことはもっとどんどんやるべきだろうなと。

それによって、ふるさと世田谷を、世田谷が好きになってくれる。それは子どもが好きになった。その親が好きになった。そういうことで世田谷をだんだん好きになることによって、極端なことを言うと、今ふるさと納税で世田谷はマイナス何億円、何十億じゃない。私、だから、ふるさと納税カムバックじゃないけれども、取り戻し作戦を、あからさまに出すと反発する人がいるかもわからないけれども、ふるさと納税取り返し作戦本部じゃないけれども、何かつくって、楽しい仕事をまずやることによって、世田谷に目を向けて、そこから世田谷にもっとお金をつぎ込んでもいいんじゃないかというのがいいのかなと。だから、この拠点をもっとどんどん増やす。

これは最近読んだ本で森村誠一が書いた「老いる意味」、私は老いていますから、つい読んでみたんですけれども、人生というのはまさに出会いの連続だというんですよ。そうすると、まず、人との出会いでしょう。次が文化との出会いだ。もう一つが地域との出会いだ。これをそっくりやってくれているんですね。ああ、こんなすばらしいことをやっているのに、これをもっと発展させるべきだろうなと。そんな意味で、これをもっとPRするというか、親しんでもらう。そういうことなんですけれども、ここは政策研究所でしたか。だから、楽しいまちづくり研究所に名称を変えて、それはオーバーですけれども、そんな感じで楽しいまちづくり何とかでふるさと納税奪還作戦を進めていく。だって、1割戻ってきただけで多分億の金でしょう。

秋山　返礼品を当てにしている人ばかりじゃないんだから、自分の郷土をよくしようと思うというアイデア、いいから考えなさいというのではなくて、アイデアがあって、よしということになっていくと思うんですよ。だから、その知恵を出すことを惜しまないというか、それからちゃんと受け止める、レシーブする人がそういうことをやる。あと発案、アイデア、今の区長に俺は言ったんだよ。もう少し知恵を出してくれ、みんな返礼品が欲しいばっかりじゃないよって。何か生かすためには、これだけの区民がいるんだから知恵はあるはずだから、もっと気がつかないところ、見えないところにまずあるはずだ。その知恵を出してもらっていることに関して惜しまないから、そういう点ではちゃんとしましょうと。

これは私事だけれども、玉川総合支所が返礼品じゃないけれども、ふるさと納税を使いますと言ったから、ああ、人間って生きるのにはまず空気が必要である。その次に水ですよ。その次に電

4　令和2年度せたがや自治政策研究・活動報告書「せたがや自治政策vol.13」参照

気ですよ。だけれども、電気は自分が発電できないからしようがないから、水、井戸を掘ってくれと言って井戸の寄附に協力したんです。そうしたら、等々力は周りから地形的に絞られてきているのか、水が出るわ出るわで、あそこでほとんど全部地下水で賄えるまで水が出たというので、ああ、よかったなと言って思ったんですけれども、やっぱり空気と水は非常に大切にしなきゃなと。そういう工夫にもなるかもしれない。

馬場　ですから、そこで、私がそんなことを言ったって、別にどうこうないんですけれども、たまたまこれを見て、ふるさと区民まつりに、これだけきれいなパンフをつくるんであれば、共生のいえ[5]ごとに、こんなパンフレット、本来ならば漫画でつくると一番、知識レベルでいくと新聞は中学生ぐらいが標準、対象だというんでしょう。中学2・3年生、中学生ですよね。

そうすると、漫画を使って共生のいえのいくつかを紹介して、そのときに漫画づくりに、その地域の中学生、小学生、高校生でもいいですよ。一緒に参加してくれませんか。それによって親も入ってくるみたいな、そう単純じゃないと思いますけれども、漫画でできないなら、こういう写真入りだとか何かカラーの、ふるさと区民まつりでこれだけのあれをつくれば、そんなに。こんなのができてみんなに配れれば、この家がすごく身近に感じられる。これをどんどん集大成していくと、この家のこういう冊子ができて、大場区長の書いた本よりずっといいものができるのではないかと、永山先生に申し訳ないけれども。

だから、さっき言ったように、森村誠一は、まず第1番目が人との出会いだというんでしょう。次が文化との出会い。それから地域との出会い、まさにこれそのままですよ。それを森村誠一が言うということは、誰もがそう感じている。それから、散歩道とか何か、いろんなものがあります。何とかの家があります。そこのこんなものをみんながぱっと見てというのは、やっぱり漫画とか写真というのは読まなくていいんですね。お年寄りも、70歳、80歳になって文章を読むのが辛い、申し訳ないですけれども、これを全部読めと言われて私は嫌になって、ぱらぱらめくりながら読みました。だから、全部読みこなしていませんけれども、一通り目は通したつもりです。そんなようなところ。

そういう中で、こんなことはとんでもないというか、えーっと思うかもしれませんけれども、この新聞を見たことがあるでしょう。朝日新聞の6月26日、ついこの間ですよ。見たことないですか。感動するというのがすごく大事だ。そこで、感動の最たるものが同じ朝日新聞、翌日の朝日新聞の一面トップですよ。夕刊とはいえ、修学旅行生がお礼を箸袋に。だから、修学旅行ができてよかった、感動した。よかったというのが出た。それを読んだ中居さんとか何かがえらい感動したと。こんなのが天下の朝日新聞ですよ。多分朝日新聞というのは日本で一番部数が多いんじゃない。下も朝日でしょう。

みなさん、読んでいると思うけれども、見ているけれども、さっと行っちゃったと思う。私、今回のこの話を聞いて、これを見て一瞬感動するというのはすごいことなんだなと思ったのと、その感動のこのこと自体は些細なことですよ。だけれども、これはすごく感動したという話だろうと思うんです。朝日が一面トップで載せるというのは、とてつもない話だと思いますよ。何十万部、何百万部と出ている話ですからね。そんなのもありましたというだけで、必要ならそちらに差し上げますし、別に私が持って帰ってもあれだから。

仕事を進めていく上で、こういう感動の話というのも取り上げて記事にしてパンフレットにして、こういう区民まつりの簡単なレリーフをつくったときに、ぱっと載せるというのが人間の心をつかんで、区民と役所側が近づく一つかなと。本当に小さなことですけれども、私はそんなところも大事にしていきたいなと思って、もう私はそんなことができる人間ではありませんから、ただ感じましたというだけにしておいてください。

古賀　ありがとうございます。お時間が少し近づいてきたので、もしよろしければ、最後に若い職員がおりますので、一言ずつ若い職員に向けてお言葉を頂戴できると。

5　せたがや地域共生のいえ

馬場　向けてというのは、私にとってはまさにこれですよ。人、だって、人間関係以外何もないんですから。人と人とのつながりでしかないんですから、人間である以上、文化ですからね。そこを大事に、人と人とのつながり。職員が仕事をしていく上で、私は自分で大事だなと思うのが、自分で仕事を楽しめと。論語にもあるでしょう。知る、知っていることよりも、好きなこと、好きなことよりも楽しむこと。だから、知識として知っただけじゃ駄目なんです。それだったら好きになりなさい。好きな人よりも、そのことを楽しんでいる人がいかに。だから、仕事をする上で、何でもいいですから、楽しみながら仕事をするのが大事なのかなと、そんな気がしていますので、できれば仕事を楽しんでください。

それには、自分がその仕事にのめり込んでというか、その仕事を好きにならなきゃ駄目。その上で楽しむんですから。そうすると、相手も楽しんでくれるし、相手も近づいてきてくれるのかなと。そんな単純な話じゃないと思いますけれども、実際にはいろんな難しいことがある。だから、さっきのあれじゃないけれども、クレーマーみたいな人が来たとき、こっちが楽しんで、あなたの言っていることもよくわかるし、どういうことですか、そのことを一緒になって話し合ってと言っているうちに、相手も変わってきちゃう。楽しんで付き合いができちゃう。そんなこともありました。

逃げない――逃げるとか逃げないという話じゃないんですね。逃げるとか逃げないというんじゃなくて、自分が楽しむことによって、相手も楽しんでくれて近づいてきてくれるというところが、私が何年か仕事をしていて、今もって老人クラブか何かへ言って碁を打ったりやっていますけれども、自分が楽しむと、相手も一緒になって楽しんでくれているなという気がしますので、人間性を大事にしていきたいなというところですね。

古賀　ありがとうございます。

秋山　何かお手伝いできることがあれば、老体に鞭打ってお手伝いしますから。百人百様でさまざまな難しいことがあるけれども、本当に楽しい。先ほど子どもさんたちが非常にいろいろなことをやって成長しているんだけれども、たまたま私の子どもは3人いたんだけれども、3人の子どもに外国のサマーキャンプに行かせたんですよね。そういう団体があったんだけれども、11歳に限るということになっているんです。

その前にも行かせたんだけれども、11歳というのはフロームイレブンといって、人間の感受性、過去のこととそのときのこと、その後のことを覚えるときの年齢的には、世界的に大体11歳の子どもの感受性というのは非常に大事なものであるということで、その前後の子どもたちはいろんなことを覚えているということでフロームイレブン、英語ではそういうことを言うんだそうですけれども、正直、なるほど、言われてみればそうだろうなという気がするんですけれども、そういう言葉もあるなということで、どこかの心の片隅に入れおいてもらえば、その子どもたちを楽しませれば、その人たちが親になったときもまだ覚えているだろうと思うんですよね。

大体そんなことで、貴重なお時間にちゃんとしたお話はできなかったんですけれどもね。

永山　今さら何を言っているのかというふうになるかもしれないけれども、馬場さんが言うように、仕事を楽しんでいくというのはすごく重要だなと。

それから、僕は絶えず仕事は改善していく。創意工夫をして改善していくということが大事だ、それが仕事を面白くするコツだなと。それには素朴な疑問を持つこと。なぜこの仕事をやっているの?この仕事って本当に必要なの?という素朴な疑問を持つ。それから、もしその仕事が必要ならば、その仕事はこの方法じゃなきゃ駄目なの?違うやり方はないの?もっとみんなが楽をしたり結果がよくなったりするような、素朴な疑問を持って改善していくということが仕事を面白くするコツだなと思うんですね。

どこの職場へ行っても、大抵行くと今まで長々やっていた仕事が不思議に思えるんだね。こんなの本当にいいのと、もっといい方法があるんじゃないか。それが改善できると、仕事がさらに面白

くなっていく。みんな職員がそういうふうに思ってくれると、仕事ってすばらしいものになるなと。素朴な疑問を持つということが僕は物ものすごく仕事に大事だと思う。そのことが絶対改善につながって、みんなの幸福になるんだよね。ぜひそれはやってもらいたい。

それから、仕事じゃないけれども、祭りのことで言うと、いずれ馬事公苑に戻れるんですか。

秋山　人が集まって出会いの場と言っているけれども、それができることならば、とにかく今のコロナ禍じゃないけれども、出会いというのは非常になくなってきちゃったでしょう。寂しい限りで、それを何とかして少しでも復帰したいなと思うけれども、それこそばい菌の塊みたいになっちゃっているから、何とかならないかなとずっと思ったまま、人生が終わっちゃうんだな。

永山　馬事公苑は、僕はすばらしい会場だと思っています。僕が一番祭りで苦労したのは、馬事公苑を大事にしている人たち、あそこで働く人たち、その人たちの苦労をあの祭りによって踏みにじるんだよね。せっかく芝生をきれいにしたのに、区民がいっぱい入ることによって潰しちゃうわけ。しかも、馬事公苑は区民まつりのあとに大事な競技がある。宮様を迎えてやる競技がある。それは大事に芝生を育てている人にすれば、何とも腹立たしいんだよね。その理解を得るのが本当に苦労した。苦労したって、これはもうなかなか理解が得られなかっただろうけれども、やっぱりあの会場はすばらしいところなので、ぜひあそこでやってもらいたいなと。

それから、私の持論なんだけれども、馬事公苑のあそこの中だけでやっているんじゃ駄目だと。何かを会場の外へ出さなきゃ駄目。それで1回は神輿が世田谷通りへ出たんだよね。そのときに馬場さんも一緒だったかどうか、そのときに区長と世田谷警察と話をしたことがあった。そのときの話が、世田谷警察署長が言ったのは、警備課長は絶対世田谷通りを神輿が通るなんてとんでもない。警備上許されない。そうしたら、その警察署長が、「だけれども、おまえ、デモには許可するんだろう。デモにすぐに許可が出て神輿は駄目なのか」、その一言で外に出るのが決定したんですね。あれはすばらしい署長だった。

馬場　だから、こっちの気持ちが伝わることによって相手の気持ちが変わってくる。これはよく知っている、聞いた。

永山　それは祭りを広げる意味でも、会場の中だけでやっているんじゃなくて、何とか外に出てほしいと。それから、よくイベントを企画するときに、マンネリという言葉を言われたことがある。僕は職員には、マンネリを恐れるな。伝統ある全国の祭りをマンネリなんて言う人がいるか。同じことを昔からやっているんだよ、ずっと。だから、マンネリなんていうのを恐れることはない。いずれ、それが伝統になるんだということね。

もう一つは、人に迷惑をかけることをやっちゃいかんなんていうのは駄目だと。むしろ迷惑はかけるほどまつりは盛大になる。それは迷惑をただかけるだけじゃ駄目だ。その迷惑を許容されるようにする。伝統の祭り、は交通ストップなどいろんなことで迷惑しているよね。だけれども、町の人はそれを喜んでいる。そういう祭りにしないと駄目だ。なかなか難しいよ。難しいけれども、迷惑はあまり気にすることはない。それを町の人がいかに許容してくれるようにするかに努力すべきだということなんですね。

馬場　今の迷惑の話、実を言うと、さっき出た区民まつりの馬事公苑の会場、まさに区民まつりで踏み荒らしているわけですよ。私たちがというか、区民があれだけうわっと来ちゃったんですから。そうすると、あそこの芝生の整備から何からしている担当者にしてみれば腹立たしいわけですよ。あとで聞いた話ですけれども、実を言うと、区民まつりが終わった翌日、文化の担当職員は私以下5人しかいないんですから、その人間が、向こうで言われたのが、釘だとか何かを当然落としていった、馬が踏みつけたりなんか怖くてしようがないと言われていたのが頭にあったもので、あの芝生の上に5人が横1列に並んで全部拾って歩いたの。

そうしたら、その中の人の誰かが見ていたんですね。馬事公苑の区民まつりの一番の責任者が先

頭に立って釘拾いをしていた。ごみの処理をした。それで翌年からは文句を言わないで貸してくれたんですよ。それはあとから聞いたんです。庶務課長だか何かと一緒に、どこかとんでもないところまで誘われて行ったんですよ。

秋山　どこに行ったの?

馬場　ずうっと遠くのどこかの競馬場。阪神のほうの……。

秋山　栗東?競馬の……。

馬場　栗東でしたか。そのときに、馬場さん、あなたが先頭に立って、釘拾いをあの暑い中、だって8月2日・3日でしょう。暑い中、タオルか何かで鉢巻きして、先頭に立っているというのを見て、担当者が文句を言えないなと言ったらしいというんですよ。そんなこと。だから、まさに迷惑はかけてもいい、後始末をちゃんとしろと。余分なことを言いました、ごめんなさい。自慢話みないになってごめんなさい。

永山　翌日やった覚えがあります。ずっと釘を拾って。

馬場　だから、誠意を見せることによって、迷惑をかけたときに相手も、あっ、そこまでやってくれるのならと。私はちっとも苦労に思っていなかったもので、どういう苦労をしましたかと言われたときに出なかったんですけれども、永山さんの話を聞いて、人に迷惑をかけてもいい、これは相当ないいかげんな人ですね。気をつけましょう。余分なことばかり言ってごめんなさい。

古賀　貴重なお時間をお話しいただいてありがとうございました。長い時間、ありがとうございました。こちらがインタビューをさせていただくよりも、本当に勉強させていただいて。

馬場　いや、こういう話はあまり参考にならなかったんじゃない。

古賀　また、今日いただいたお話の中でも意見交換をしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

おわりに

秋山　ここでお開き。じゃ、全然違う話をいい。すぐ終わるからね。まず、私の家に東京でマイタケが生えたんですよ。マイタケが生えたので、トラストまちづくりで日にちの認定する証明を取って、5月と10月に我が家に合計3回生えたのかな。東京でマイタケができるなんていうのは新聞に載っちゃうからさ。だから、今は伏せてあるんだけれども、証明を取りましたということがまず一つなんです。　それから、これは直接関係ないんだけれども、みなさんは人間を相手にしているからあれでしょうけれども、山のナラノキのナラ枯れという言葉を聞いたことがございますか。ナラの林が紅葉になっちゃって全部だめ。

馬場　ナラノキというと何に使うか、知っていますか。ほとんどナラ炭、炭です。

秋山　これは世田谷で私の家の木なんですが、昨日撮ったんですよ。これはシイノキじゃなくてカシ、カシとナラとミズナラ、その3種類、全国的に増えてきちゃって、これがいよいよ世田谷までやってきたということなんですね。これは間もなく新聞で多分、こういう虫が北のほうからやってきまして、これがついた木に泡が残っていて、そこに細菌が生えるらしいんで、多分枯れちゃうんですよ。これが北のほうからだんだん来て、世田谷に来たよということで、これは我が家で昨日撮った写真で、この白くなっているところが全部虫がついちゃって、今日午前中、世田谷区の方が樹木医という人を連れてさっき来てくれたんだけれども、これからだんだん南の国のほうへ蔓延していくだろうということなので、あっ、どこかで

聞いたなという話は、一番最初に世田谷で聞いたと覚えていてください。非常に厄介な病気で、木を伐採するかどうするかしないと木が全部。

僕は四、五年前に黒部渓谷で、夏じゃないな、新緑のいいときにもう紅葉している山が一面全部あって、おかしいな、おかしいなと言ったら、それがだんだんこっちに来て、今、世田谷でこれが始まっちゃったというふうになっていますので、どこかで耳に入るでしょう。直接飲み食いするのには関係ない。たまたまこれはトラストに未練があって行ったり来たりしているので、情報として出させてもらいます。

古賀　ありがとうございました。

馬場　何か余分なことばっかり言ったような。

古賀　いいえ、とんでもないです。本当に貴重なお話をありがとうございました。